

大学生参加による地域づくりに関する一考察

—放課後子ども教室を事例に—

西村千尋
上濱龍也

1. はじめに

子ども達の危機が叫ばれて久しい。入口ら¹⁾によると、急激な経済的発展の背後で、子どもの遊びの世界は縮小・欠損化を余儀なくされており、人口の都市集中・無秩序な宅地造成・モータリゼーション等による余剰空間の減少、コミュニティの崩壊と近隣社会の人間関係の稀薄化、テレビの普及やコモディティの進行、学歴偏重社会が生み出す受験戦争の過剰化等々、いずれの問題を取り上げても子どもの遊びに望ましい影響を与えているとは考えられず、子どもの遊びを成立させる「時間」「空間」「仲間」の条件に、すべてがマイナスに作用していると予想される、と述べている。また、三根²⁾も、近年、都市化や少子化・核家族化の進行、女性の社会進出等により、子どもを取り巻く環境が大きく変化しており、共働き家庭の増加やそれに伴う家族機能の縮小化は、子どもの成長に必要と考える人や自然と直接ふれあう機会を減少させた、と指摘している。さらに三根²⁾は続けて、地域内に子ども達が安心して遊べる空き地や路地等の空間が減少する中で、塾や習い事へ通う子ども達も増え、子ども同士の遊びやふれあいの時間も減少している一方で、情報技術の発達によって携帯電話やメールなどをとおしての間接的なコミュニケーションが増大し、子ども達が巻き込まれる犯罪も見受けられる、と述べている。そして、これらの問題は、

子どもの直接的なコミュニケーション能力や運動能力、人間関係能力の低下に影響を与えていること、また、子育てを担う親をみても、子育てに関する知識・経験やサポート不足から不安感を募らせ、それが親子関係における緊張の増大や子どもの養育放棄、児童虐待等につながっている側面も無視できないことを指摘している。

このような変化の中、子ども達の成長における放課後児童対策の重要性が増している。放課後は、子ども達が比較的自由に過ごせる時間といえるが、核家族化の進行や共働き家庭の増加によって、周囲の大人から目の届かない時間ともなっている。また、子ども達の遊びの質にも変化が生じており、入口ら¹⁾は、家の外での遊びの種類の経年変化において、室内遊びとも言うべき「ゲーム (カードゲームを含む)」が、1999年には見られなかったのに対し、2007年には存在していることを明らかにした。すなわち、現在の子どもは屋外でもゲーム機器で遊んでいる様子がうかがえる。このことより、家の外で「ゲーム (カードゲームを含む)」をすることを「遊び」と捉えている児童が多いといえる。今やコンパクトになり持ち運びができるようになったゲーム機器の発展が、「時間」「空間」「仲間」に制約を受けている児童の象徴ともいえるべき事柄であると同時に、現代社会を忠実に反映している、と述べている。

このうち「空間」という点から見た場合、自然空間での体験活動が減少・欠落してる報告が多く見受けられる。吉野ら³⁾は、大学生を対象に聞き取り調査を行い、児童期の外遊び・自然体験とその活動場所について分析している。遊びに関しては、ドッジボールや野球等のボールを使った遊びや、どろけいやおにごっこなどが印象に残っており、最も夢中になった遊びには自然体験はあまり挙げられなかった。10年前の子ども時代の遊びの中で、被験者の印象に最も残っているのは、遊具を使った遊びやごっこ遊びであり、自然体験は最も身近な遊びではなかった、と報告している。また、須賀⁴⁾も、生涯の QOL (quality of life) に必要となる運動の基礎は、幼少年期に幅広く身につけることが大事で、そのためには、十分な運動遊びの習

慣が大切であると述べた上で、とりわけ家庭における親と子の暮らしとして、子どもの豊かな想像力を楽しむ暮らし、自然生活を楽しむ暮らし、「プレイとしてのスポーツ」を楽しむ暮らしの3つの観点から考察を行っている。その結果、子どものために考えるだけでなく、親自身が自然生活を楽しむ暮らしを大事にしたり、スポーツとの関わりを楽しむ暮らしを大切にするなど、自分自身のライフスタイルを人間らしく心豊かなものにしていくとする意識をもつこと、そして子どもを預かる園では、暮らしの中の自然な遊びが少なくなった分、自由な運動遊びを大切にすることを指摘している。すなわち、外遊びの空間を大人が意図的に作り出す必要がある。

ところで、文部科学省と厚生労働省が設けた「放課後子どもプラン」にみる制度は、学童保育対象児童も含みこみつつ、すべての子どもを対象とし、遊びや体験・交流活動などの活動を行うものとして子どもの放課後に対する積極的な教育的関与の志向性をより強く持つものであり、そこで子どもに関わるのは専門的知識を有する指導員というよりも、地域住民などであり、地域の子どもの「見守る」または、地域の子どもの「交流する」存在として措定されている⁹⁾。さらに、「放課後子どもプラン」のうち文部科学省が進める「放課後子ども教室推進事業」（以下、放課後子ども教室）に、大学生が参加する事例も見られるようになった。このような中、大学研究室活動の一環として、2005年度の地域子ども教室の時期より大学生とともに参画してきた長崎県佐世保市のある放課後子ども教室活動が、2012年12月3日に「平成24年度優れた『地域による学校支援活動』推進にかかる文部科学大臣表彰」を受賞した。その受賞理由のひとつに地元大学との連携があげられている。

そこで、本研究では、長崎県佐世保市の放課後子ども教室とそれに参画した大学研究室の8年にわたる活動について、地域づくりの観点から分析を行うものである。

2. 放課後子ども教室

(1) 放課後子ども教室とは

三根²⁾によると、これまで国は、その時代ごとのニーズに対応するような厚生労働省・文部科学省の両者によってそれぞれ放課後児童対策を行ってきた。旧文部省においては、古くから放課後児童対策を行ってきた。初期の1960年代には、「かぎっ子問題」「青少年非行」対策として、留守家庭児童に対する活動の補助を行ったが、その後、全児童を対象とした施策へとその対象範囲を拡大した。1990年代からは全児童を対象とし地域の大人等の指導員が体験活動などを提供する施策が各自治体で開始されはじめ、それは2004年に「地域子ども教室推進事業」として結実する。しかし現状は、どの地域においてもボランティアや保護者などのスタッフ不足の問題、この事業を行っている多くが学校の空き教室を利用しているため、学校・教師への負担の増加といった問題も浮かび上がっている。このようなスタッフ不足、学校・教師への負担の増加といった反面、参加する子どもの増加とも関連して、子ども一人ひとりに目が行き届かなくなる等の安全面に関する問題点も数多く挙げられている、と三根²⁾は言う。また、文部科学省では、各自治体からボトムアップという形で作り上げられた「地域子ども教室推進事業」(2004年度から3年間限定)が2006年度で終わりを迎えること、あわせて2006年前後に起こった子ども達の悲惨な事件にどう対処するかという大きな課題を抱えていた。

このような放課後児童対策をめぐる課題を背景に、2007年度には少子化担当・文部科学・厚生労働三大臣合意によって「放課後子どもプラン」がスタートした。「放課後子どもプラン」とは、「地域社会の中で、放課後や週末等に子ども達が安全で安心して、健やかに育まれるよう、文部科学省の『放課後子ども教室推進事業』と厚生労働省の『放課後児童健全育成事業』を一体的あるいは連携して実施するもの」である。このプランの最も重要な点は、これまで両省が行ってきた政策を「一体的あるいは連携」し

て実施するということであり、これは我が国の放課後児童対策における歴史の中で大きなターニング・ポイントとなることは間違いない、と三根は指摘している²⁾。

さらに、猿渡⁶⁾は、メリットとして、子どもが放課後に過ごす、安心できる受け皿ができたこと、子ども教室での異年齢間交流が学校での学年を縦断した縦割り活動をより円滑にしていること、子ども教室のスタッフとの情報交換で児童理解がより進んでいること、子ども教室に地域住民が関わることで、地域住民の学校や子どもへの意識が高まり、地域での子どもを取り巻く犯罪の防止につながっていると思われることを挙げている。一方、デメリットとしては、学校施設の管理や非常時の対応、子どもの安全管理が困難になっていることを挙げている。つまり、子ども教室は、学校内にありながら、希望する子ども誰もが幅広い活動を自由にのびのびとすることができるとともに、保護者や地域住民もそうした活動に関わることができるという空間になっていることが重要であるとしている。

(2) 大学生が参加した事例

文部科学省・厚生労働省生涯学習政策局生涯学習推進課放課後子どもプラン連携推進室が作成した資料⁷⁾によると、6つの活動が紹介されている。

①茨城県大子町「大子養護学校放課後子ども教室 スマイルクラブ」

茨城キリスト教大学が参加しており、大学生の役割は以下のとおりである。

- ・子ども達の宿題のお手伝い、疑問、質問に答える。
- ・教室に来る子ども達の安全サポート。
- ・運動や読書など、子ども達と一緒に活動すること。

②埼玉県久喜市「ゆうゆうプラザ」

東京家政大学が参加しており、大学生の役割は以下のとおりである。

- ・いろいろな遊びを担当し、子ども達が決めた遊びの輪に参加する。

- ・遊びの中でルールの確認や安全に活動ができるように配慮する。
- ・運営スタッフの一員として受付の仕事や下校の点呼等を行う。

③千葉県我孫子市「あびっ子クラブ」

参加大学は川村学園女子大学で、大学生の役割は以下のとおりである。

- ・子ども達が安全・安心に過ごせるように見守ること。
- ・遊びやスポーツ、読書など、子ども達と一緒に活動すること。
- ・宿題（勉強）を自主的に自分でできるように見守る。

④新潟県三条市「放課後子ども教室」

新潟大学が参加しており、大学生の役割は以下のとおりである。

- ・教室に来る子ども達を見守ること。
- ・スポーツや読書など、子ども達と一緒に活動すること。

⑤大阪府柏原市「のびのびルーム」

参加大学は、大阪教育大学と関西福祉科学大学である。大学生の役割は以下のとおりである。

- ・教室に来る子ども達の安全を見守ること。
- ・子ども達と一緒に遊び、活動すること。
- ・子ども達の宿題のお手伝い。
- ・教室内容の企画、運営。

⑥広島県東広島市「放課後子ども教室三ツ城わくわく広場」

参加大学は広島大学で、学生の役割は以下の教室を担当している。

- 「自習教室」「ハンドベル教室」「将棋教室」「けんだま教室」
- 「折り紙教室」「ヒップホップダンス教室」

以上のように、大学生が参加する形態としては、学習支援型と見守り型

が多いが、一部には企画・運営にも携わっている例も見受けられる。大学生の参加が、スタッフ不足を解消するためのものであるかは明らかにはならなかった。

3. 長崎県佐世保市の事例分析

ここでは長崎県の佐世保市立日野小学校区放課後子ども教室「かっちえてクラブ」(以下、かっちえてクラブ)と同クラブに参画している大学生を事例として取り上げる。

(1) かっちえてクラブの活動の概要

文部科学省・厚生労働省生涯学習政策局生涯学習推進課放課後子どもプラン連携推進室は、同クラブを以下のように紹介している⁸⁾。

活動開始は2004年度で、2013年度6月の時点で代表者は前川一雄氏が務めている。組織としては、先の代表者の他に、学校長、企画担当、広報担当、渉外担当、会計、安全管理、オブザーバー、PTA代表で構成されている。現在、オブザーバーとしては、参加している大学生の指導教員が加わっている。

年間開催日数は約20日である。主な活動場所は、同小学校の体育館や運動場などである。活動内容としては、地域の人材や学習資源を有効に活用した様々な活動に継続的に取り組んでいる。その内容は、学校教育では体験できないようなことが意図的に企画され、学校教育を補完する役割を果たしている。また、住民に対して生涯学習の場を提供するとともに、参画する住民同士がネットワーク化されており、地域の基盤づくりにもつながっている。

特徴的な活動内容として、次の4項目が挙げている。

①地域人材や校区内の自然環境などを積極的に活用して、郷土を学ぶ多様

な機会を数多く展開している。

- ②学校教育では体験することが難しい機会を積極的に提供し、学校教育を補完する関係を構築している。
- ③活動の中で、地域住民の学習成果を発揮する機会を意図的に設け、生涯学習支援と地域のネットワークづくりに貢献している。
- ④校区内の大学と連携し、大学の専門性を活かした活動を行うとともに、相互支援・相互貢献の関係を構築している。

実施にあたっての工夫として、次の3点を挙げている。

- ①校区内に居住する様々な人材を発掘し、星空観望会や科学教室など、専門的知識を有する地域人材が、地域に住む一住民として教室に参画している。
 - ②九十九島など地域の財産を学習資源として活用し、郷土に対する関心を高め、郷土愛を醸成している。
 - ③開催にあたり、地域住民のスタッフとしての参加を増やし、地域の子どもたちを地域みんなで育てようという機運のもと運営している。
- 同クラブの年間活動計画は、表1に示すとおりである。

表1. かっちえてクラブの年間の活動計画

6月	エアロビクス・出前牧場
7月	紙飛行機づくり・習字・竹細工
8月	工作・石膏粘土・習字
9月	英語
10月	英語・NAGASAKI ペンギン体操
11月	みんなで遊ぼう
12月	クリスマスクラフト作り・もちつき大会
1月	グラウンドホッケー
2月	お菓子作り・少林寺拳法・バスケットボール

事業を実施しての効果として、保護者と地域の信頼関係が生まれ、放課後子ども教室以外でも、朝の登校見守り活動や、子どもをまきこんだ地域行事などが活発化している点と、子どもの豊かな育みの時間・場を創出しただけでなく、地域住民や保護者そして近隣大学およびその学生の相互理解や連携を生み、子どもも大人も地域の中で成長している。特に大学生との交流は、子どもたちや地域に大きな活力を与えている点を挙げている。

このような取り組みが認められ、2012年11月21日の文部科学省による報道発表において、同クラブが「平成24年度優れた『地域による学校支援活動』推進にかかる文部科学大臣表彰」のひとつに選ばれたことが公表された。放課後子ども教室における活動での受賞は長崎県では初である。評価を受けたポイントは先に挙げたとおりである⁹⁾。その4項目のうち3項目は大学生が関わってきたものである。また、2005年度より8年間続けてきた活動が評価されたことが受賞理由のひとつとなっている。表彰式は同年12月3日に行われた。

(2) 参画している地元大学生

参画した大学生の所属する研究室は「自然環境を活かした地域づくり・健康づくり」をメインテーマに取り組みを行っている。その代表的な活動

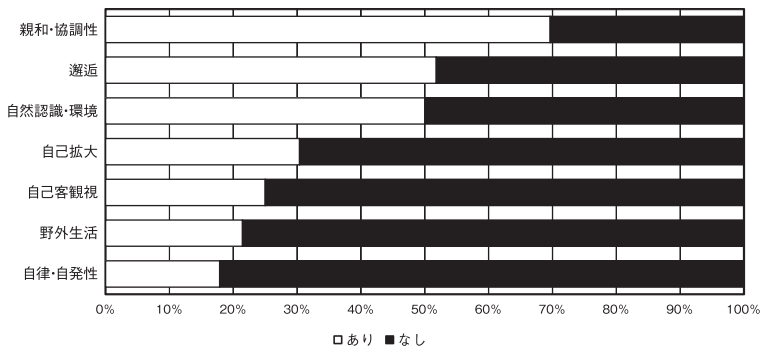


図1. シーカヤック実習直後の効果

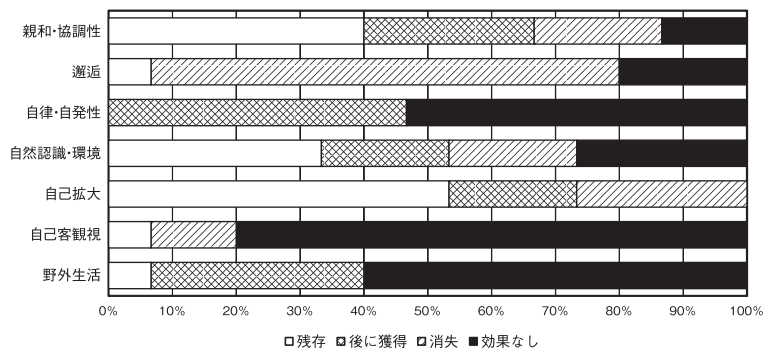


図2. シーカヤック実習からしばらく経ってからの効果

のひとつに、地域資源である西海国立公園九十九島をフィールドに行ってきたシーカヤックの活動がある。図1および図2に示したように、その教育効果について検討したところ、シーカヤックによる体験活動により、直後には履修学生に「親和・協調性」が効果として現れたこと、そしてしばらく経ってからは「自律・自発性」が効果として現れたことを報告している¹⁰⁾。このような教育効果を礎に、地域住民に対して有効なプログラムの開発を行い、「シーカヤック・コミュニケーション・プログラム」として、地元企業の内定者研修や沖縄でのウェルネスフェア等で提供している。このような教育効果と活動実績をもとに、かっちえてクラブへの参画を決めている。

表2は、大学生がかっちえてクラブで行ってきた活動の概要を示したものである。2004年の佐世保での事件をきっかけに、「地域住民のひとり」として大学教員からの申し出により、2005年から活動を開始した。開始から2年は月1回の活動を計画し、外遊びを中心に展開してきた。その後はプログラムを精選して参画している。

このうち一例として「九十九島かるた」を紹介する。表3にはかるた完成までの過程を示している。

「九十九島かるた」は、当時の西海パールシーセンター九十九島調査室

表2. 大学生が参画したかっちえてクラブでの活動の概要

年	回数	主な内容
2005*	10	外遊び
2006*	10	外遊び（7/1は大雨で中止）
2007**	3	九十九島かるたづくり・外遊び
2008	3	九十九島かるたづくり・外遊び
2009	5	九十九島かるた・親子シーカヤック・よかこマップ 親子魚市場探検隊・外遊び（バンブーダンス）
2010	4	海きらら探検隊・外遊び
2011	1	出前牧場・外遊び
2012	3	出前牧場・NAGASAKI ペンギン体操教室・外遊び

*：2005年度および2006年度は地域子ども教室として実施

**：放課後子ども教室「かっちえてクラブ」発足

（現在の九十九島ビジターセンター九十九島調査室）との共同調査報告書をベースにしており、生涯学習の教材として、大学生とかっちえてクラブに参加した小学生と協働で制作された。佐世保市のシンボルともいえる西海国立公園九十九島の島々に伝わる民話・伝説や、九十九島をとりまく歴史・文化・自然環境などの豊かな資源をわかりやすくまとめている。絵札と読み札、またそれぞれの裏面まで見て楽しんで遊べるよう工夫をこらしている。読み札の裏面には、大学生が作成した大学研究室のイメージキャラクターであるマスコットを載せている。かるたの枠の色は、読み札が九十九島の夕日をイメージしたオレンジ色、絵札は九十九島の海の色と島の色をイメージした緑色で表している。この九十九島かるたによって、たくさんの人に九十九島を身近に感じてもらうだけでなく、九十九島に興味・関心・愛着を持ち、自分たちの住んでいるまちに誇りを感じてもらうとともに、九十九島の歴史・文化・自然環境の保全へと活用していくことを目指している。

このかるたに関して、同クラブ代表の前川氏は「長崎県立大学の学生さんが、これまで取り組んでこられた『九十九島かるた』は、幼児から小学

生を対象にされた『かるた』として子どもたちに大変な好評を得ております。西海国立公園『九十九島』を題材にした自然と古来からの遊び心がマッチした『かるた』として完成度の高いものであります。」と、評している。

この活動は、「平成20年度長崎県学生さんのまちおこし・地域づくり事業」に採択され、作成にあたっては活動費の助成を受けている。

また、このかるたは「全国の郷土かるた」のひとつとして、新聞紙上や関連団体のホームページで紹介されている¹¹⁾。さらに、東日本大震災の被災地の子ども達に九十九島かるたを寄贈している。

表3. 「九十九島かるた」ができるまで

2004年 8～11月	九十九島の島名調査
2004年11月30日	九十九島208の島名調査 中間報告書／南九十九島
2007年11月 4日	かるた読み札作成 (日野小学校放課後子ども教室)
2007年12月 9日	第1回かるた絵札作成 (日野小学校放課後子ども教室) 第1回アンケート調査
2008年 5月16日	長崎県学生さんのまちおこし・地域づくり事業 申請
2008年 6月 1日	長崎県学生さんのまちおこし・地域づくり事業 審査会
2008年 6月24日	長崎県学生さんのまちおこし・地域づくり事業 採択
2008年 7月19日	第2回かるた絵札作成 (日野小学校放課後子ども教室)
2008年11月 1日	第1回かるた遊び (日野小学校放課後子ども教室)
2008年12月14日	第2回かるた遊び (日野小学校放課後子ども教室) 第2回アンケート調査
2008年12月18日	長崎県学生さんのまちおこし・地域づくり事業 中間報告会
2009年 2月17日	長崎県学生さんのまちおこし・地域づくり事業 最終報告会
2009年 5月30日	「九十九島かるた」完成

(3) 大学生に対する事前指導

2005年3月に、大学生が参画するにあたって、担当教員が指導案を作成している。

大学生の内的成長をひとつのねらいとしているため、指導者、大学生、

および小学生の関わり方にステージを設け取り組んでいる。

第1ステージは、活動初期の段階であり、指導者の作成したプログラムを大学生が小学生と一緒に、忠実に進行していく段階である。この段階では、小学生のリーダー、すなわちガキ大将的存在としての役割が求められる、プログラムを小学生とともに楽しむことが要求される。この場合、指導者は大学生と小学生をひとつの遊び集団とみなして関わることになる。

第2ステージでは、指導者と大学生の間で、プログラムについて検討を行い、小学生に提供していく段階である。指導者のアシスタントとしての役割が求められている。一部のプログラムの進行を大学生が担当することもある。

第3ステージでは、指導者と大学生が企画した小学生対象のプログラムのすべての進行を大学生が担当する段階である。この段階がさらに進んだ場合、大学生がすべてプログラムの企画・立案を行い、指導者は最小限の介入で済ませることもある。すなわち、大学生はインストラクターとしての役割を担うことになる。さらに、参画する大学生は、学年の異なる複数人でプログラムを担当することもあるため、指導者の役割を上級生が担うこともある。

ここでの特徴は、「役割は人を成長させる」という前提のもとに、大学生の役割を明確に設定している点である。また、参加する大学生の経験に応じて、担う役割を分担するよう配慮している。大学生自身が所属する集団の中で、学び合う環境が設定されている。

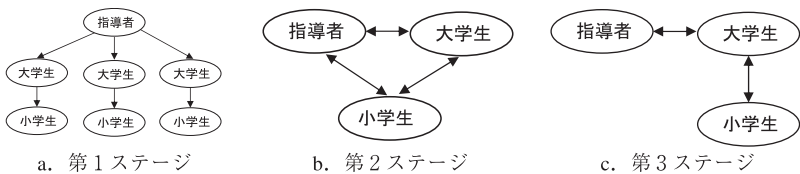


図3. かつちえてクラブにおける指導者・大学生と小学生の関わり

実施までには、実施計画案の作成、役割分担、そして模擬活動を行うようになってきている。また、実施後は、現場での短いシェアリングが行われるだけでなく、それをもとに後日大学において、活動に関するレポートと時間をかけたシェアリングが行われ、次の活動へとつないでいく場が設けられている。

安全面では、救急法の講習を定期的に受けるとともに、リスクマネジメントについての講習も準備されている。保険の面では、学生教育研究災害傷害保険の適用を受けるために、活動ごとに「参加届」を大学の担当部局に必ず提出している。

(4) 大学生の活動に関する考察

① 大学での学びの環境

森下と松浦¹²⁾は、放課後の地域生活空間は異年齢の子どもだけでなく、様々な人々との交友・実体験空間であり、教育学・心理学・社会学・地域福祉・環境学ほか多様な研究分野のカップリング研究をベースに政策立案を進める必要がある、と指摘している。

かっちえてクラブに参画しているのは、長崎県佐世保市にある長崎県立大学の学生である。参画する大学生は、主に地域政策学科に所属し、図4に示すような流れで学習している。4年間の学びをとおして、地域の課題を抽出し、その解決策について提言できるの力の獲得を目指している。地域の情報化とその情報に基づく教材化がひとつの流れとなっていることがうかがえる。

その学びの特徴のひとつは、学問として大学内で学ぶだけでなく、フィールドワークを積極的に取り入れていることである(表4)。フィールドワークに臨むにあたっては、事前指導を十分に行うことと、報告会などを行いフィードバックを必ず実施している。このフィールドワークを体験した大学生には、大きな内的成長が認められている。また、図4および表4に示すように、所属する教員が専門分野を超えた教育研究活動を展開している

ことは、森下と松浦¹²⁾の指摘に対する回答になるであろう。さらに、教材化のために必要な一次データの収集に関しては、社会調査法などの授業が配科されている。

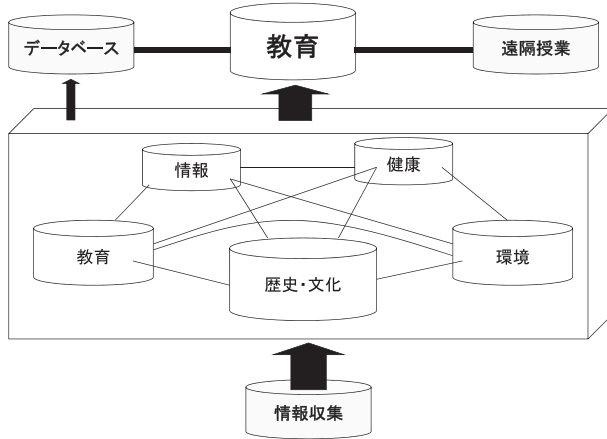


図4. 参加した大学生の所属する学科での学びの流れ

表4. 参加した大学生の所属する学科での学びの特徴

<ul style="list-style-type: none"> ・ Field work (現地調査・実地調査・巡検) ・ Trans-scientific approach (研究分野を超えた連携) ・ Evidence-based policy and practice (事実証拠に基づく政策と実践)

② 体験の重視

猿渡と佐藤¹³⁾は、次のように述べている。放課後子ども教室が学校施設をベースとしながらも、活動領域を地域に広げ、弾力的な活動を展開することが中長期的視点の中で求められると考えられるだろう。他方、短期的な視点では、学校施設内という限られた環境の中で「生きる力」を育む土台とするべく、「ホンモノ体験」をどのように充実させていくかという課題がある。このことについて、佐藤¹⁴⁾は子どもに必要な教育体験を構成す

る3つの要素を指摘している。1つめはヒト体験であり、異年齢の友人や高齢者などの世代間交流と、同世代との交流の2つの側面で進化・拡大することが重要であるとする。2つめはコト体験とし、未体験のコト、新しいコト、困難なコトにチャレンジすることが大切であるとしている。最後に3つめの要素としてはモノ体験を挙げている。これは生活用具や動植物、



写真1. 出前牧場での搾乳体験
(2012年6月)



写真2. 九十九島遊び「九十九島かるたづくり<絵札づくり>」
(2008年7月)

乗り物、歴史的資料など様々なモノを見たり、触ったり、使ったりする体験であるとしている。体験活動の実施にあたっては、上記の要素をバランスよく組み込むことが重要であるとしている。

写真1は大学研究室のコーディネートにより実現した「出前牧場」である。九州の酪農家との連携により、搾乳体験、心音の聞き取り、バターづくりなどの体験プログラムが用意された。このようなコーディネートは大学教員の手によって行われる「ホンモノ体験」である。各プログラムの進行は酪農家で、大学生はアシスタント的立場で酪農家を補助する。子ども達にとっては、ヒト体験、モノ体験、そしてコト体験のすべてが体験できるプログラムである。また、ヒト体験としては、先に挙げた九十九島かるたづくりがある。

写真2は、小学生とともに大学生がかかるたづくりに取り組む様子である。小学生、地域住民、保護者、大学生といった多様な主体が関与する形で世代間交流が行われている。

③ 活動場所の拡大

猿渡と佐藤²⁾によれば、子ども達は一日の生活の大部分を学校と家の中でだけで完結している。他方で放課後に地域で活動する機会はほとんどなくなる。このように地域から子どもがいなくなることは、地域の大人と子どもとの交流の機会がいつそう減少することになり、凶らずも地域教育力の低下にいつそう拍車がかかる懸念すらもたれてしまう。さらに人的交流の側面だけでなく、学校外での多様な生活体験の機会を奪うことにもつながると考えられる。どれだけ放課後子ども教室の中で、体験活動を充実させようとも、学校施設のみでの活動には限界があり、本来地域で体験したであろう生活体験のすべてを補うことは不可能である。特に、インターネットなどの普及により、直接顔を合わせた他者とのコミュニケーションが不足しているといわれる現代の子どもにとっては、家庭や学校以外の多様な他者との交流や、多様な生活体験が可能となる地域社会との関わりは非常



写真3. 九十九島遊び「親子シーカヤック」
(2008・2009年10月)

表5. 水族館での活動内容

2010年9月	九十九島遊び「海きらら探検隊<フィールドワーク>」
10月	九十九島遊び「海きらら探検隊<マップづくり>」
12月	もちつき大会でマップ展示
2011年2月	九十九島遊び「海きらら探検隊<マップで歩こう!>」



写真4. 九十九島遊び「魚市場探検隊<親子お魚料理教室>」
(2010年2月)

に重要なものとなっており¹⁴⁾、そうした交流の機会が失われることは事業の抱える大きな課題である、と述べている。

これに対し、かっちえてクラブの活動では、大学生の企画した学校外での活動に、学校側は当初難色を示していたが、同クラブの後押しもあり、近接する九十九島をフィールドに、親子を対象とした「シーカヤック・コミュニケーション・プログラム」を実施している（写真3）。その後、水族館（表5）や魚市場（写真4）での活動も展開するなど、地域の教育資源を積極的に活用している。

(5) 課題

これまで課題について検討している報告は以下のとおりである。まず、時と明石¹⁵⁻¹⁶⁾は、体験活動によって、集団の凝集力・人間関係、そして学習意欲・行動様式に改善がみられる一方、もとの学級組織が機能しにくくなり、学級経営に手を打つ必要が生じることが挙げられる。また、猿渡と佐藤¹²⁾は、今後、事業が地域の子どもの社会教育の機会として定着化していくことも重要であると述べている。つまり、重要なことは放課後子ども教室の社会教育事業としての意識を、事業に関わる行政関係者だけでなく、スタッフや地域住民、保護者、そして学校関係者が共有し、再認識することである、と指摘している。

しかしながら、このような点に関しては、かっちえてクラブの取り組みについて文部科学省が評価しているように、学校教育では体験することが難しい機会を地域社会と大学研究室との連携により積極的に提供し、学校教育を補完する関係を構築していることで解消しているように思われる。その背景には、地域住民と学校側との間の積極的なコミュニケーションが構築されていることが挙げられる。

したがって、強いて課題として挙げるならば、さらに多様な地域住民の参画ができるようなネットワークの充実を図るとともに、すでに関わっている地域住民の自己効力感などを情報として発信していくことが必要であ

ろう。この点では、佐藤¹⁴⁾が指摘しているように、大学生の力に依存した「奉仕」の強制にならないよう配慮していく必要がある。つまり、大学生生活や社会生活の一場面における成長の場として、放課後子ども教室に参画していくならば、大学生に対する事前・事後の指導や地域社会との調整に関して、大学教員が配慮していく必要があろう。

4. 結びにかえて

本研究では、放課後子ども教室への大学生の参画について、長崎県佐世保市の事例を分析し考察を行った。大きな特徴としては、「大学生も地域住民のひとり」として参画している点にある。その役割も、他の事例に多い「学習支援型」や「見守り型」ではなく、プログラムの企画・立案から実施までを責任をもって担うインストラクターやプログラム提供者のサポートを行うアシスタントとしての参画であることが明らかとなった。このような取り組みは、大学生にとって内的成長の場を提供することになるが、多くが陥りがちな奉仕の強制にならないように大学教員が地域住民や学校関係者と緊密な連携をとることが大切なことである。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、長崎県佐世保市立日野小学校区放課後子ども教室「かっちえてクラブ」代表前川一雄氏をはじめとする運営委員会および同小学校区の地域住民の皆様には多大なるご協力を賜りましたことを深謝いたします。

引用文献

- 1) 入口 豊・齋藤 覚・稲森あゆみ・一原悦子・屋麻戸浩「大阪市における児童の屋外遊びの実態に関する経年変化研究（Ⅰ）—特に、遊び時間と遊び場について—」『大阪教育大学紀要』第57巻第2号, 53-67, 2009.
- 2) 三根佳祐「我が国における放課後児童対策の展開」『大阪経済大学論集』第62巻第2号, 151

- 168, 2011.
- 3) 吉野美沙樹・古谷勝則・鈴木薫美子「大学生に聞いた児童期の外遊び・自然体験とその活動場所」『ランドスケープ研究』第74巻第5号, 591-596, 2011.
 - 4) 須賀由紀子「子どもの身体・運動・遊びー健やかな身体を育む生活文化の探求ー」『実践女子大学生活科学部紀要』第43号, 92-103, 2006.
 - 5) 佐藤晃子「近年の「子どもの放課後」をめぐる政策的変容に関する一考察ー「生活の場」としての学童保育の位置づけをめぐるー」『生涯学習・社会教育学研究』第33号, 45-54, 2008.
 - 6) 猿渡智衛「「地域子ども教室」は学校にどのような影響を与えるのか?」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』第5号, 1-12, 2005.
 - 7) 文部科学省・厚生労働省生涯学習政策局生涯学習推進課放課後子どもプラン連携推進室「大学生が参加する「放課後子ども教室」の事例」
<http://manabi-mirai.mext.go.jp/houkago/document.html> (2013年6月16日閲覧)
 - 8) 文部科学省・厚生労働省生涯学習政策局生涯学習推進課放課後子どもプラン連携推進室「かっちえてクラブ(日野小学校区放課後子ども教室)」
<http://manabi-mirai.mext.go.jp/exam/detail/kyushu/2904.html> (2013年6月16日閲覧)
 - 9) 文部科学省「平成24年度優れた「地域による学校支援活動」推進にかかる文部科学大臣表彰について」http://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/1328448.htm
 - 10) 西村千尋・下園博信「マリリン(シーカヤック)実習が参加学生の心理面と授業評価に及ぼす効果について」『体育・スポーツ教育研究』第4巻第1号, 18-23, 2003.
 - 11) 郷土かるた館「全国の郷土かるた」<http://homepage 2.nifty.com/taki-forest/karuta/karuta.html>
(2013年6月16日閲覧)
 - 12) 森下智広・松浦善満「放課後の子どもと「放課後子どもプラン」の課題」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』第21巻, 135-, 2011.
 - 13) 猿渡智衛・佐藤三三「放課後子ども教室事業の現代的課題に関する一考察ー子どもの社会教育の視点からー」『弘前大学教育学部紀要』第106号, 47-61, 2011.
 - 14) 佐藤一子『子どもが育つ地域社会』東京大学出版会, 2002年
 - 15) 時代・明石要一「体験活動が子どもに与える影響ー2年間の体験活動事例を通してー」『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻, 121-132, 2012.
 - 16) 時代・明石要一「体験活動の効果及び評価のあり方に関する一考察ー子どもの体験活動事例を追ってー」『千葉大学教育学部研究紀要』第59巻, 167-173, 2010.